S. de Beaumont

ボーヴォワール著作集

3

他人の血・ごくつぶし

Le sang des autres
Les Bouches inutiles

佐藤朔 訳

人文書院

ボーヴォワール著作集第3巻

他人の血・ごくつぶし

This book is published in Japan by arrangements with Gallimard through Bureau des Copyrights Français.

© *Editions Gallimard*

初版発行日　1967年4月1日
重版発行日　1973年2月20日

訳　者　佐藤　朔

発行者　渡辺睦久

装幀者　真鍋　博

印刷所　小林印刷所

製本所　坂井製本所

(分)0397(製)011003(出)3266

株式会社　人文書院
京都市下京区仏光寺高倉　TEL(351)3343・3391

ボーヴォワール著作集　第3巻

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

目次

他人の血……5
ごくつぶし……245

他人の血

ナタリー・ソロキーヌへ

「各人はすべてのことについて万人に責任がある」（ドストエフスキー）

ドアを開けると、みんなの眼が彼の方に向けられた。
「なにか用かね？」と彼は言った。
ローランは、火の前で、椅子にまたがっていた。
「明日の朝決行するかどうか、知りたいんだ」とローランが言った。
明日。彼はあたりを見廻した。部屋は、灰汁とキャベツスープの匂いがした。マドレーヌは、テーブルクロースに両肱をついて、タバコを吸っていた。ドニーズは、開けた本を前にしていた。彼らは生きている。彼らには、この夜も終り、朝がくるだろう。
ローランは彼をじっと見ていた。
「待っていられないんだ」と彼はしずかに言った。
「行くんなら、僕は八時にあそこへ行ってなくちゃならない」
彼は病人に話すみたいに、用心深い話し方をした。
「むろんだよ」
なんとか答えるべきだとわかっていながら、彼にはそれができなかった。
「じゃ、眼がさめたら、僕の所へきてくれ。ドアを叩いてくれさえすりゃあいい。それまでよく考えてみたい」
「承知した。六時ごろ、ドアを叩くぜ」とローランが言った。
「あの女、どんな工合？」とドニーズがきいた。
「いまのところ、眠っている」と彼は言った。
彼はドアの方に歩いて行った。
「用があったら呼んでね」とマドレーヌが言った。「ローランは寝に行くけど、私たちは一晩中ここにいてよ」
「ありがとう」
彼はドアを押した。決めるのだ。彼女の眼は閉じられている。唇から喘ぐ息が洩れている。毛布が上下してい

る。少し上りすぎる。生命がはっきりしすぎ、音が高すぎる。生命は苦しみ、いまにも消え失せようとしている。明け方には消えてしまうだろう。僕のせいで。前にはジャック、今度はエレーヌだ。僕が彼女を愛さなかったせいであり、愛したせいでもある。彼女があまり近づいてきたせいであり、あまり遠くにいたせいでもある。僕が存在しているせいなのだ。僕は存在している。自由で、孤独で、永遠だった彼女が、僕の存在の残酷な事実を避けきれず、機械的な時間の運行に釘づけにされ、僕の存在に従属してしまった。そして真ん中に盲目の鋼鉄を打ち込まれた、運命の連鎖の端れには、金属のきびしい現存があり、僕の現存があり、彼女の死があった。僕が、不透明に、不可避に、無理由に、そこにいたためなのだ。僕は存在してはいけなかった人間なのだ。前にはジャック、今度はエレーヌだ。

戸外は、夜だった。街燈がつかず、星もなく、人声もしない夜だった。さっきパトロールが通った。いまはもう誰も通らない。通りには人気がない。大ホテルや官庁の前では、歩哨が警備している。何も起らない。だが、ここでは、あることが起っている。彼女が死にかけているのだ。《前にはジャックだった》またしても、このことばは凝結する。だが、夜がゆっくりと流れて行くうちに、他のことばや過去の映像を通して、始めからの醜聞が歴史をくりひろげる。醜聞は歴史風の、特殊な形態をしていた。別のことも可能であり、僕の誕生以来、なにも定っていなかったみたいだ。つまり人間のどんな運命にも、絶対的腐敗が匿されているのだった。それは僕の誕生以来あり、瀕死の部屋のにおいとうす暗がりのなかにあり、各瞬間にも、また永遠のなかにも存在している。僕は、今日も、そしていつだって、そこにいる。いつだって、そこにいたのだ。その前には時間が存在していなかった。時間が始ってからは、永久に、僕自身の死を超えて、僕はそこにいたのだ。

彼はそこにいながら、最初、それと気がつかなかった。いまは廻廊の窓にもたれていたときの彼の姿が見える。だが彼は気がつかなかった。彼は世界だけが存在しているのだと思っていた。インクや埃の匂い、他人の労働のにおいが、むーっと昇ってくる汚れたガラス窓を眺めていた。ここでは日光が樫材の家具にふりそそいでいるのに、下の人々はみどり色の笠のランプのにぶい光線の下で喘いでいた。午後の間中、印刷機は単調にうなっていた。時どき、彼は逃げだした。時どき、彼は眼、耳、鼻

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

孔から、悔恨を体内に流しこみながら、永いこと動かずにいた。汚い窓ガラスの下の、床の上には、倦怠が溜っていた。しかし明るい壁の、細長い部屋には、悔恨がしずかに渦巻いてはひろがった。職工たちが顔を上げれば、ブルジョアの小伜らしい、彼の利巧そうな、生き生きとした顔が見えることを、彼は知らなかった。

青いビロードのカーテンが、頬にふれてこころよかった。銅器の光っている料理場からは、溶けたラードと砂糖を煮つめたいいにおいが流れてきた。サロンでは、絹のようになめらかな声がささやいていた。だが、夏の花花の薫り、おだやかな冬のパチパチ燃える炎のなかにも、悔恨はいつまでも消えずに漂っていた。休暇で遠くへ旅行するときは、悔恨をあとに残して行った。悔恨を忘れて、夜空に流れる星を見たり、林檎を嚙みくだいたり、淡水に裸の足を濡らしたりした。しかし、家具に白い覆いのかかった、においのたちこめた部屋に帰ってくると、ナフタリンの詰っているカーテンを揺すると、たちまち根づよい悔恨がもとのまま見出されるのだった。季節は移ろい行き、風景が変り、三方金の本のなかに新しい恋物語がくりひろげられた。だが、印刷機の同じような音は少しも変らなかった。

うす暗い一階から、例のにおいが家中に浸み渡って行った。「いつかは、みんなお前の家になるのだよ」玄関の正面には、「ブロマール父子、印刷業」と石に刻んだ文字が掲げてあった。父親はしずかな歩調で、工場から本宅の方に上ってきた。彼は階段によどんでいる重苦しい空気も、平気で吸っていた。エリザベトとシュゾンは、なにも気にしていなかった。彼女たちは自分の部屋の壁に版画をかけたり、寝椅子にクッションをおいたりしていた。だが母親は、たしかに、最上のよき日々の輝きさえくもらしてしまう、あの不女を知っていた。彼女にとっても、輝いている嵌木細工の床や、絹のカーテンや厚毛の絨毯を通して、悔恨が滲みだしているのであった。

彼女はまだ余所でも、未知の形の悔恨に会ったのに違いない。彼女は毛皮の外套の下や、金糸の衣裳の下に、その小肥りの小さい体にぴったりつけて、悔恨をどこへでも持ち歩いていた。だからこそ、彼女はいつも、申しわけなさそうな様子をしていた。彼女は召使や商人に向っても、すまなそうな調子で話した。彼女は小刻みで足早に歩き、自分の占めている空間をもっと小さくするためかのように、すっかり身を縮めて歩くのだった。彼は母にいろいろきいてみたいとは思ったが、どんな風に話

していいのかよくわからなかった。ある日、彼は工場の人たちのことを話してみた。すると彼女は、早口だが、おちついた声で言った。

「だけどね。あの人たちだって、それほどいやな気持じゃないのだよ。慣れているからね。それに人生では、誰だっていやなこともしなければならないからね」彼はもうそれ以上なにもきこうとしなかった。母の言うことは、たいしたことではなかった。母はいつも、怒らしてはならない、気むずかしい、有力な証人のまえで話しているような印象をあたえた。しかし母が料理女の子供のために、デパートでもすぐ買えるような産衣を熱心に仕立てたり、女中が下手にやったつくろい物を夜なべして縫い直したりしているのを見ると、彼には母がわかるような気がした。「ばかばかしいわ。あんなことする理由がないのに」とシュゾンとエリザベトは、非難するような口調で言っていた。母は自分を正当化しようとしなかった。朝から晩まで、右往左往し、ひっきりなしに逃げ廻って、中気の老家政婦の移動椅子を何時間も押してやったり、つんぼの従妹と指や唇で話したりした。それなのにその老家政婦や従妹を好きというのでもなかった。彼女たちのためを思って面倒をみてやるのではなく、それは家中に滲み込んでいる不快なにおいのためだった。

時どきジャンをつれて、彼女は貧乏人を見廻りに行った。小ざっぱりした子供たちに、クリスマスツリーとおやつを持って行ってやった。子供たちは、縫いぐるみのりっぱな熊や、かわいいエプロンをもらって、行儀よくお礼を言った。彼らがみじめだという気は少しもしなかった。ぼろを着て路傍に坐っている乞食だって、心配にはならなかった。沙漠に駱駝がおり、シナにござをまいたシナ人がいるのと同じように、往来の彼らは自然な場所を占めているのだった。詩的な放浪者や、憐れな孤児の話を聞かしてもらっても、いつもおしまいにはうれし涙、握手、新しい下着、黄金いろのパンであった。貧乏は、慰められるために、金持の子供に施しの喜びをあたえるために、存在しているだけみたいだった。ジャンは貧乏には心を動かされなかった。だが、他になにかがあることを、三万金の本には書いてないことがあることを、彼は知っていた。これは母も話してくれないことだった。たぶん話すことが禁められていたのだろう。

僕の心が始めて醜聞を知ったのは、八歳のときだった。僕は廻廊で本をよんでいた。母がよくやる、非難と弁解の入りまじった表情で入ってきて、言った。「ルイズの

赤ちゃんが死んだのよ」

曲りくねった階段とよく似たドアがたくさんある石廊下を、僕は覚えている。どのドアのうしろにも一つの部屋があって、そこに一家の者が暮しているのだ、とママが言った。僕たちはなかに入った。ルイズが僕を抱きしめた。その頬は柔かく、濡れていた。ママは彼女と並んでベッドの上に、腰かけて、低い声で話しはじめた。ゆりかごのなかには、眼を閉じた、蒼白い赤ん坊がいた。僕は赤い敷石、裸の壁、ガスコンロを見た。僕は泣きだした。僕は泣いていたが、ママはしゃべっていたし、赤ん坊は死んでいた。僕は自分の貯金箱をからにすることもできたし、ママは幾晩もお通夜をすることができたろう。それでも赤ん坊はやはり生き返りはしないだろう。

「この子はどうしたんだ?」と父が言った。

「私と一緒にルイズの家へ行ったんですの」とママが言った。

その話はもう報告ずみだったのに、彼女は脳膜炎、苦しみ通した夜、それから明け方につめたくなった体などのことを、もう一度感動的に繰返して話した。パパはポタージュを食べながらきいていた。僕は食べられなかった。あの家ではルイズが泣いている。彼女も食物がのどを通らなかった。だけど、どうしたって赤ん坊が戻ってくることはないだろう。世界をけがしたこの汚点を消すことはできないだろう。

「さあ、スープをお上り」と父が言った。「みんなすんでしまったよ」

「お腹がすかないんだもの」

「少しむりしてでも食べて頂戴」とママが言った。

僕は匙を口に持って行ったが、げっぷがでたので皿の上に匙をおいてしまった。

「食べられないや……」

「ねえ」と父が言った。「ルイズの赤ん坊が死んだことは、大変悲しいことだ。わたしも彼女のために気の毒だと思うが、そのことを一生泣いているわけには行かないよ。さ、いそいでお上り」

僕は食べた。このきびしい声が、一挙に、僕ののどをしめつけていた万力をゆるめてくれたのだ。僕は生ぬるい液体が、のどの粘膜に流れるのを感じた。そして一匙ごとに、僕の体内に、印刷所のにおい以上に嘔気を催させるようなものが流れ込んだ。だが、万力はゆるんでしまった。一生っていうわけには行かない。「今夜、夜が明けるまで。それにあと数日間だろう。一生っていうわ

けではない。要するに、これは彼の不幸で、僕たちのではない。これは彼の死だ。ジャックはベンチの上に寝かされて、カラーは引きちぎれ、顔の上に血がかたまっていた。それは彼の血で、僕の血じゃない。《僕は決して忘れないだろう》マルセルも心のなかでそう叫んだ。《決して忘れないよ、かわいい顔を、かわいくて、利巧な、いい子を。お前の笑い声や、生き生きした眼を、決して、忘れないよ》彼の死は僕たちの生活の底に、おとなしく、さりげなく、宿っている。生きている僕たちは、それを思い出す。それを思いだすことで生きているのだ。それなのに彼の死は存在していない。死んでしまった彼にとっては、その死は一度だって存在したことがなかった。一生っていうわけではない。数日間でも、一分でも、存在しないのだ、エレーヌよ、お前はベッドの上で一人きりだ。そして僕には、お前の口から洩れる息の喘ぎしか聞えない。だが、それも、お前には聞えないのだ』

彼はポタージュをすまし、夕食も全部平らげてしまった。こんどはグランドピアノの蔭に坐り込んでしまった。シャンデリアはさんさんと輝き、糖衣をかぶせた果物がきらきらしていた。ケーキのように、やわらかで、色あざやかな美しい夫人たちが微笑していた。彼は母を見つめていた。彼女はこの香水をつけた妖精たちには似ていない。両肩の露わな黒い服を着て、同じように黒い髪の毛は、ウェーブして頭の回りを巻いていた。だが、母の前だと、花や贅沢な菓子を、または貝殻や海辺の青い石などを想いだすわけにはいかなかった。一つの存在、人間的な純粋な存在であった。彼女は踵の高すぎる小さな繻子靴をはいて、サロンを端から端まで走り廻っていた。そして彼女もやはり微笑んでいた。彼女までもが。さっきまでは、途方にくれた顔をして、低いけれど緊張した声で、ルイズの耳もとで囁いていたのに、いまではあんなに笑っている。一生っていうわけではない。彼は絨毯をむしっていた。ルイズの赤ん坊は死んでしまった。彼はむりにあの映像を思い浮かべようとした。ベッドの縁に腰掛けて泣いているルイズの姿。彼はもう泣きはしなかった。そしてやはり、あの固定した、透明な映像を通して、彼はいま菱色(モーヴ)、みどり色、バラ色の衣裳を眼で追っていた。すると欲望がまた湧いてきた。このクリームのような腕に嚙みついて、髪の毛に顔を埋め、うす絹を花びらのようにもみくちゃにしてやりたいという欲望だ。ルイズの赤ん坊は死んだ。無益に。あれは僕の不幸じゃない。

『僕の死じゃない。僕は眼を閉じる。じっと動かずにいる。だが僕が思いだすのは、僕のことだ。そして彼の死は僕の生のなかに入るが、僕は彼の死のなかに入れない』僕はピアノの蔭にもぐり込んだ。それからベッドで眠り込むまで泣いた。それは生ぬるいポタージュと一緒にのどのなかに流れ込んだもののせいだ。それは悔恨より苦い、僕の過ちのせいだ。ルイズが泣いている間、微笑したという過ち、僕の涙を流し、彼の涙を流させなかったという過ちだ。それは他人であるという過ちだった。

だが彼はあまり小さかったので、それがわからなかった。握りしめた指が開いたために、のどが自由になったために、過ちが急に体のなかに入り込んだのだと思っていた。過ちとは、僕の胸を一杯にする空気そのものであり、血管を流れる血、生命の熱であることが、彼には分らなかった。彼はうんと勉強しさえすれば、こんな汚辱感は二度と味わわないだろうと思っていた。彼は勉強した。彼は生徒机の前に坐った。彼の無邪気な視線は、過去のない、未来のように無垢なページを撫でた。『裸の紙。虚ろな画布。未来の革命の彼方に輝いている、清らかな凍った土地。マルセルは画筆を捨てた。ジャックの顔の上の血。僕たちが流さずにすんだ血の滴りの代りに、また僕たちが流した血の滴りの代りに湯気の立っている血。君の血。白い脱脂綿やガーゼの上の赤い血。お前のふくれた血管のなかの、怠惰で、鈍重な血。《エレーヌは今夜持つまい……》花もなく、柩車もなく、僕たちは、お前を埋葬するだろう』僕の手の上のこの泥。僕たちの魂の上のこの泥。これが子供っぽい字を、太く細く書いた、利巧な少年の未来だった。彼はそんなことは知らなかった。自分の存在の重みを知らなかった。白いページを前にして、半透明で白い彼は、華々しい、しかるべき未来を考えながら、微笑していた。

母は道理に合った話し方をした。そういうときは、いつもの縮こまったような身振りや、おずおずした小刻みな歩き方をしない人みたいだった。彼女は、貧困と奴隷、軍隊と戦争は、激しい熱狂や陰惨な誤解などと同じことで、人間の愚劣さ、測り知れない愚劣さ以外のものではない、と語った。人間が希望しさえすれば、万事そうならないですむと言うのだ。僕は人間の気違い沙汰には腹が立った。僕たちは手をつないで、町を歩くべきだと思っていた。母は小さなハイヒールの靴をはいて小刻みに歩き、僕は子供らしい乱暴さで彼女をぐいぐいと引張って行く。そうすれば広場の通行人を止めることができる

し、キャフェに入って行って、群集に演説することだってできるのだ。それほど不可能なこととは思えなかった。セヴィルの日覆いのある通りで、クーデタのあった熱狂的な朝、人々は混乱に陥り、急に駈けだした。パパは人波に逆わずに、エリザベトとシュゾンの手を引張って駈けていた。ママは立止った。そして愚かな押し合いをとめようとして、小さな両手をひろげた。パパがママをつかまえずに、彼も男らしい大きな手をひろげたら、きっと群集もおとなしくなって、しずかに歩きだしたろうと、僕は思った。

しかし僕の父は、群集の盲目的な歩みをとめようなどとは夢にも思わなかった。彼は威厳をもって群集のなかを駈け抜けてしまい、どんなに忠告したところで、彼の一途な歩調を妨げることはできなかった。僕が無邪気な質問をはじめると、彼は初めのうちは微笑っていた。そのうちに微笑わなくなった。彼は自分の仕事と克己的な生活を、気むずかしい顔をして誇らしげに語るのだった。彼は身の回りの贅沢さについて、自分はそれを享楽しようなどとつゆ思わないのだから、それだけ確実な権利があると思っていた。彼は一日中仕事をして、晩になるとメモをとりながら大きな本を読んでいた。客を招くことは嫌いで、殆ど外出もしなかった。飲食物にも無関心だった。葉巻、ブルゴーニュ酒、一八九三年のアルマニャック酒などは、ただ彼の心の平静のために必要な特別扱いにしているみたいだった。

「平等っていうのは、いつだって低いところで行われる」と父は説明した。「お前は大衆を向上させることはできない。結局、優れた者を滅ぼすことになるだけだ」その声は断定的で、反駁のしようがなかった。しかしその眼の奥には、一種のはげしい恐怖の色が浮かんでいた。僕は黙っていた。そして僕には少しずつ真相がわかってきた。父は世界の腐ったにおいを、香水のように吸って楽しんでいるのだ。それはわが家だけではなかったからだ。町中に、地球全体に、そのにおいが滲み込んでいた。夕方、地下鉄のなかで僕は同じような息苦しさを感じた。男は膝の上に両手をおいていた。女の眼はどんよりしていた。進行中の車の動揺のために、重苦しい空気のなかで、彼らの汗と労苦が揺れていた。電車がタイル張りの停車場に入ると、極彩色のポスターのストーヴや罐詰の広告が、地上の日常生活を反映していた。それから電車はまた暗いトンネルに入った。これが疲れ切った群集の運命さながらのように思えて、僕の胸はしめつけられた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo